

新川神社の歴史は誠に古いのであります。

日本三代実録と申します国史に『清和天皇(五十六代)

貞觀九年(西暦八六七)越中國正五位上新川神

に從四位下を授けき』とあり、新川郡の郡名は御祭神である「大新川命」の御神名から起こつたと伝承され、

永年地域に生活する人々の崇敬を受けて参りました。

宮司家所蔵の宝永三年(一七〇六)新川四社大権現

由来書が伝える伝説によれば、「新庄村は白鳳三年

(六七三)に老人夫婦顯れ、『我是面足尊、煌根尊

の化身なり、神の山の清き流れがそぞぐこの地を新川と

号し、守護神と成らん。』と申すや靈験を現され、白鷹と

なり飛び去つていったという。それよりこの地を新庄村と

唱えるようになつた」と記してあります。今日でも新川神

社の社紋は鷹の羽を意匠した「違ひ鷹の羽」であります。

その昔、新川神社の神域は現在の場所より約二キロ北東

方向の北陸街道(現在の国道四十一号線)の沿道である

五本榎辺りの志摩(嶋)の郷に鎮座いたしておりました。

天文年間(一五三二)に新庄城(別名、太田新城・

辰城)を築城し、城下の鎮守神として産土神・氏神

である神々を祭り、社領・神宝等の寄進が盛んで崇敬があつたと伝えられています。

新庄城の守り神

その昔、新川神社の神域は現在の場所より約二キロ北東

方向の北陸街道(現在の国道四十一号線)の沿道である

五本榎辺りの志摩(嶋)の郷に鎮座いたしておりました。

天文年間(一五三二)に新庄城(別名、太田新城・

辰城)を築城し、城下の鎮守神として産土神・氏神

である神々を祭り、社領・神宝等の寄進が盛んで崇敬があつたと伝えられています。

新庄城の運命と共に神社の社領・神器・神宝などが失

度重なる戦火により新庄城は攻められては落城し、

城主は幾度も入れ替わりました。

新庄城の運命と共に神社の社領・神器・神宝などが失

われ、その縁起や古文書などもすべて灰と化したことは

こんにちいたお

今日に至り惜しまれるところです。

天災を鎮める祈りと誓い

また元和元年(一六一五)一国一城令によりこの新

庄城は廢城となり、奇しくもこの夏、常願寺川の洪水

に遭つて新川神社の社殿は浸水してしまいました。

荒れ狂う洪水の勢いが留まることなく数多くの民家が

つぶされていく中、住民たちは今の境内地に集まり、遙か

新川神社に向かい、「このところを境界として洪水を留め

てくれるのであれば、神殿をここに遷してさしあげました。

新川神社に誓を立て祈願いたしましたところ、不思議にも水

はたちまち減退して行き、一同歡喜いたしました。

御靈験あらたかな新川神社の神々

御靈験を現された新川神社の神々とのお約束を果たすべく、

翌年(元和二年)には附近の住民達によつて

新庄城外の高台であつた現在地に遷座されたのです

た。その当時、この地はずいぶん高台であつたようですが、

安政の地震後の洪水で土砂が周囲を埋めてしまい、自然

に現在のような平地になつたようです。

その後も幾度かの洪水に見舞われましたが境内には被害

はなく、以来近隣の皆さん(新庄・向新庄・荒川)から水神

として尊崇され、社殿修理の際は広田郷・針原郷からも駆

けつけて協力されました。

厄除 災難除 運気向上 発展の神様

永い歴史を有する新川神社は元來新庄城の鬼門に鎮座し、

城下を守護したことから厄除けの御利益がある神社とし

て今日まで厄年に当たる人々は正月にお祓いを受け、

無病息災を祈ります。また、農耕に従事される新庄の

人々は水神として崇敬し、五穀豊穰を祈つてきました。

新庄で事業をされる企業は「事故や災いが無きように、

また運を授かるように導き給え」と祈りを捧げてきました、

運気向上と生産・発展を司る守護神なのです。

新川神社の歴史は誠に古く、そして現在を通じて未来へと続いて行くのです。